



Title	モダニスト芥川龍之介の研究 : 中国物・開化物・自己表象を中心として〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高, 啓豪
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13246号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71500
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kao_Chihao_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 高 啓 豪

主査 教授 中 村 三 春
審査委員 副査 准教授 水 溜 真由美
副査 教授 富 田 康 之

学位論文題名

モダニスト芥川龍之介の研究
——中国物・開化物・自己表象を中心として——

・当該研究領域における本論文の研究成果

大正時代ひいては日本近代を代表する作家の一人芥川龍之介の業績について、これまでに長い研究史の積み重ねがあるが、初期においてその多くは芥川の個人史に作品を位置づける方法を採用していた。その後、この半世紀の間において、日本古典や同時代西洋の文芸及び芸術思潮との関わりから、古典と近代、あるいは比較文学の手法によって作品を分析し、またはジェンダー批評やポストコロニアリズムの観点から新たな評価を試みる動きも見られる。その中で芥川が活動した1920年代前後のモダニズム文芸との繋がりを論じたものは少なく、2000年代以降になって内外における幾つかの研究論文が発表されたに過ぎない。本論文はそれら従来の個人史的研究、古典と近代、比較文学、ジェンダー批評、ポストコロニアリズムなどの基盤の上に、それらの見地も取り入れながら、専らモダニズム文芸として芥川作品を解明し、時代の先端を走ったモダニストとして芥川を再評価しようとする意欲的な研究である。

本論文は明治以来の日本の近代化・近代主義という広義のモダニズムと、それに対する批判的超克の性格をも帯びた1920年代前後のアヴァンギャルド文芸運動という狭義のモダニズムとの両者の要素を芥川作品に認め、複数の類別の下に芥川文芸をモダニズムの観点から分析した。具体的には、三部構成から成る本論において、第一に「支那趣味」と呼ばれた中国物の中にモダン・ライフの要素や近代の地政学的な構成、身体感覚における前衛的な表現を見出し、第二に明治初期を舞台とする開化物に、国民国家形成期の近代主義に対する批評的な精神とそのメタファーとしての表現を認め、第三に芥川自身の周囲に取材したいわゆる保吉物など自己表象的な諸作品について、直覚的かつ連想中心で小説の筋が溶解し、意識と無意識との軋轢の痕跡が刻印されたシュールレアリスム的な創作手法を看取した。その結果として、これまで古典と個人史に圍繞されてきた芥川の文芸様式を、過去と現在と対決し芸術の未来を志向する独自のモダニズムとして定式化するに至った。

このような特長によって、本論文は芥川龍之介の研究において、特筆すべき研究成果を示すものとして評価することができる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は作品研究の対象として「杜子春」「南京の基督」「首が落ちた話」「馬の脚」などの中国物、「お富の貞操」「開化の殺人」「開化の良人」「舞踏会」「雛」などの開化物、「疑惑」「保吉の手帳か

ら」「蜃気楼」「歯車」などの自己表象物を取り上げている。これらは各々について、文体、レトリック、語り、視覚性、身体感覚、意識と無意識など、文芸的なモダニズムの表現手法の観点に基づく精緻な作品分析と、日本における近代国民国家形成の問題、日中間の地政学的な情勢、伝統文化・社会の変容、ロティ、ストリンドベリ、ニーチェの作品の受容など、近代主義に関して個々の作品の抱える固有の問題性の解明によって詳細に論じられている。これによって、モダニズム文芸とアヴァンギャルド文芸の観点から、広く知られている芥川の諸作品を新たな相貌の下に浮かび上がらせることに成功している。加えて、芥川の晩年において谷崎潤一郎との間に行われた『話』らしい話のない小説」論争において芥川が主張した、「詩的精神」を重視する『話』らしい話のない小説」の概念を、芥川のモダニズム的な文芸手法の到達点として理解し、特に自己表象物の諸作品をその実践として再評価しうることを綿密な読解によって論証した。これにより芥川文芸がモダニズムの一翼を担う重要な様式であることが解明されたことから、本審査委員会においては、原則的に本論文を、高い水準にある研究として評価した。

ただし、幾つかの点に互って疑問の余地もなしとはしない。すなわち、第一に多様な方法論が次々と援用されるために、それらが対象となるテキストについて妥当な分析結果を出しているか明確でない箇所が少なからず散見されること、第二にモダニズムの概念規定に強いて作品をあてはめようとする余り、本来の作品のあり方から懸け離れた解釈となる場合が見られること、第三に特に西洋文芸の比較文学的な導入の取り扱いにやや難が認められること、第四に既成のモダニズム概念やアヴァンギャルド芸術の理念を枠組みとして適用することに性急な反面、芥川独自の文芸様式の定位については必ずしも十分とは言えないことなどである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の意欲的な研究姿勢と表裏をなすものであり、本論文全体の達成度を損なうものではなく、また今後も引き続き芥川に関する研究を持続する中でさらに考察を進めることによって、十分に解決する課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。